

## 1921年のシアトルにおける日本人 ブッチャーの組合加盟問題

黒 川 勝 利

### I

アメリカ合衆国ワシントン州シアトルにおける労働団体と日本人移民社会との関係は、特に1919年2月のゼネラル・ストライキを契機として改善の方向に向かい、1920年代には、なおも労働団体が排日勢力の重要部分をなしていたカリフォルニア州のサンフランシスコなどはかなり異なった状況が生まれた<sup>(1)</sup>。しかしながら、日本人を正組合員として迎え入れ白人とまったく同様の権利を与えようとする組合は、シアトルにおいてもやはり多くはなかった。

そのまれな例が北米食肉加工屠殺労働者合同組合のローカル81 Amalgamated Meat Cutters and Butcher Workmen of North America, Local Union No.81である。このノートは1921年にこのローカルが日本人労働者の組織化を決定してそれに成功するまでの経緯を、当時シアトルで発行されていた日本語新聞『大北日報』*The Great Northern Daily News*、シアトル中央労働評議会の機関紙『シアトル・ユニオン・レコード』*The Seattle Union Record*などの記事を参考にしつつ、整理したものである<sup>(2)(3)</sup>。

統一鉱山労組 United Mine Workers of America のワイオミング州南部ロックスプリングスのローカルが日本人の加入を承認したのは1907年のことである<sup>(4)</sup>。それから1921年までに14年が経過している。この間にシアトルお

よびその近辺でもいくつかの組合が日本人の加入を承認した。1920年には機械工組合のワシントン州、およびオレゴン州支部がタコマの大会において黒人、フィリピン人とともに日本人をも組織化の対象にすることを決定している<sup>(5)</sup>。したがって1921年の段階では、ローカル81はその指導者が北米日本人会に向けた書簡の中で自負したような、「日本人たちを承認するのが適切であると考えているアメリカで唯一の組合 the only Union in America that seen fit to recognize the Japanese Boys」ではすでにない<sup>(6)</sup>。

とはいえ当時のアメリカの労働団体のほとんどは、サミュエル・ゴンパースを中心とするアメリカ労働総同盟 American Federation of Labor 本部の指導のもとに、日本人労働者の加入になお強固に抵抗していた。そしてこのような抵抗は結局のところ1930年代まで続くのである。それゆえこの時点におけるローカル81の決定とその後の努力、およびそれに対する日本人社会の反応は合衆国労働運動史、および日本人移民史の双方において注目すべき問題の一つとして、ここで紹介するだけの価値を有しているように思われる。

## II

ローカル81が日本人ブッチャーの組織化を決議したのは1921年3月15日であった。そこに至る組合側の論理を4月1日の『ユニオン・レコード』は以下のように報じている。

シアトルの食肉加工組合が地域の肉店で雇われている日本人ブッチャーを組織しようと努力している。ジョー・ホフマン書記長によれば、未組織の日本人は彼らの賃金が白人ブッチャー労働者よりはるかに低い水準にあるかぎりにおいて食肉産業の労働条件における危険な存在となっている。

ローカル81のメンバーは日本人ブッチャー自体に敵意を抱いているわけではないが、今後の賃金交渉における切り下げを防ぐために食肉加工組合の水準まで彼

らの賃金を上昇させたいと望んでいる。賃金と労働条件を均衡させることによって、人種対立の可能性の原因の多くは軽減されるであろう。これが組織化のキャンペーンの最大の理由である<sup>(7)</sup>。

他方で4月18日の『大北日報』はより組合側の諸事情に立ち入った形での間の事情を述べている。

今ユニオン側より加盟勧誘をなすに至れる大体の経過を報ぜんに元来ユニオン内には保守進歩、急進の三派あり保守派は稍やともすれば人種の觀念より日本人のユニオン加盟を悦ばざる風あるに進歩急進兩派の人々は日本人をも包括して労働団体を組織せんと希望を有し双派は常に労働会合に於て熱論を闘かはし来りたるものなりブチャース、ユニオンの如きにありても其の保守分子は常に日本人包括反対の態度に出で来りしが同組合現幹事ホフマン氏は假狹意見の時勢に適せざるを力説し遂ひに去る三月十五日同組合週次例会に於て日本人同業者を加盟しむるの件決定せられたり<sup>(8)</sup>

ローカル内部の議論に決着をつけたホフマンの次の問題は、このような決定をどのようにして日本人ブッチャーに伝え、組合への加盟を促すかということであった。当時としてはまったく奇異なことではないがブッチャーズ・ユニオンと日本人肉店とはそれまで接触、交渉の機会すらなかったのである。そこでホフマンは、当時すでに日本人理髪業者が独自の組合を結成し、しかもそれが白人理髪業組合と友好的な関係にあったことから、白人理髪業組合の幹部を通じて日本人理髪業組合の組合長伊東忠三郎に協力を要請した<sup>(9)</sup>。伊藤忠三郎はシアトル日本人社会の有力者であって、双方にとって幸運なことに当時北米日本人会の会長を務めていたのである。

伊東はこの問題を単に肉店、魚店のみならずシアトル日本人社会全体に影響を及ぼす重大案件と考え、北米日本人会全体としてこれに取り組むこと

を決心した。北米日本人会幹部の多くもこれに同意見であった。4月16日の『大北日報』はその前日の北米日本人会参事委員会の模様を以下のように記録している。

労働組合加盟勧誘に就ての交渉を受けたる顛末及び此後の方法に関し本会の態度を如何にするべきか伊東会長堀内理事よりの詳細なる説明あり議場に謀りたるが本案は慎重熟議を要する重大問題にして等閑に附すれば直接概営業者に一大打撃を蒙り延いては一般在留者の日用にも関する事件なるを以て幹部及び第四労働部業部に於て研究の上当業者及び白人組合委員との間に円満なる解決を告げしむべく決定し十一時半散会せり<sup>(10)</sup>

北米日本人会が真剣にならざるを得ない理由は十分にあった。

ゼネラル・ストライキを契機として労働団体の対日本人感情は好転していたとはいえ、一般的に言えば1921年というのは全国的にも、あるいはここシアトルにおいても、むしろ排日運動が一つの頂点に達した時期であった。いわゆる排日土地法の制定、日本人をねらい打ちにした営業規制などの動きがあいつぎ、北米日本人会はその対応に追われていたのである。このために設立された米化委員会の活動も期待されたような効果は挙げていなかった。たしかに、1921年というのは労働団体を再び敵に回すことになるかも知れないような危険を犯すべき時期ではなかった<sup>(11)</sup>。

他方で、働きかけの直接の対象となるべき日本人肉店、魚店経営者たちにとってローカル81の動きは必ずしも歓迎すべきことではなかった。賃金や営業時間等について当時の合衆国のクラフト・ユニオンイズムが課していた様々な規制が、日本人経営者には経営の自由を束縛する不当な干渉としか受け取れなかったであろうことは、想像に難くない。そしてそのような利害と感情のおもむくままにもし日本人肉店、魚店経営者がローカル81の働きかけを拒否したならば、その影響はすでに危機にさらされているシアトル日本人社会

全体に及ぶ可能性があった。

実際、この参事委員会が開かれたのと同じ15日付けでホフマンは、北米日本人会あてにこれまでの経緯を説明するとともにより一層の協力を要請する書簡を送っている。この書簡が参事委員会が開かれる前に北米日本人会に到着したかどうか、今私には確認するすべがない。しかしながらその中には「手間取ると我々の善意は撤回されることになるかも知れません delay may upset our good intentions」という、見方によっては脅しともとれる言葉も含まれているのである<sup>(12)</sup>。

すなわち、かつては排日的であった労働組合がついに日本人の加盟を認めるに至ったのは、シアトルの日本人社会を代表する北米日本人会として歓迎すべきことである。しかしながら、もしもここで対応を誤ったならば好意は一転して敵意にかわり、かえって悲惨な結果を招くことになるであろう。「本案は慎重熟議を要する重大問題にして等閑に附すれば直接概営業者に一大打撃を蒙り延いては一般在留者の日用にも関する事件なるを以て」という北米日本人会の危機感は、けっして杞憂ではなかったのである。

かくして北米日本人会幹部は、日本人肉店および魚店経営者を個別訪問してローカル81の提案を受け入れるよう説得し、19日には労働組合側の関係者と日本人肉店、魚店経営者たちとの懇談会を開催した。この懇談会の日本人側の出席者は北米日本人会幹事、第4部部員、肉店および魚店関係者21名であって、労働組合側はホフマンの他に、ローカル81の副組合長マクリース、およびシアトル中央労働評議会書記のダンカンが出席した。この懇談会における労働組合側の言動は翌日の『大北日報』に次のように記されている。

マ氏は労働階級利益の爲めに日本人同業者の加盟を主張し次にダンカン氏はマルクス主義を高唱し對資本案階級對労働階級の争闘に就ての根本理由に説を起して一社會共存する同階級が結束して相争ふ経路を説き一々实例を指摘し更らに日本人對全米労働組合の關係現状を詳説し現在の親善關係を熱望する旨を力説し次い

でホッフマン氏はブッチャーユニオンの組織内容に就て詳説する所ありたり

ダンカンはその当時のシアトル労働運動でもっとも影響力のあった人物であり、この記事の見出しの中にも「ダンカン自ら出馬して熱論」という表現がある。

その後自由質問、意見交換を経て労働組合側は退出した。残った日本人側は協議の結果組合加盟を前向きに検討することを決定し、鳥井、田中、太田、森本、伊達の5名を加盟のための準備委員として選出した<sup>(13)</sup>。

加盟準備委員たちはその翌々日の21日になお協議を重ね下記の2点につきローカル81に確認することを決定、そのための交渉を北米日本人会に依託した。

1. 日本人食肉および魚店経営者たちは、もし組合に加入した場合、近隣の非組合店の不公正かつ無思慮な競争に対して、アメリカ労働総同盟とローカル81からいかなる保証を期待することができるのか。
2. 日本人は、組合の憲章と付則によって与えられた権利と特権を損なうことなしにローカル81の第2支部（Branch No. 2 of Local #81）と呼ばれるであろう分離した団体を形成しても差し支えないのか<sup>(14)</sup>。

ここで特に注目に値するのは第2項である。なぜなら、先に述べたワイオミング州ロックスプリングスの場合、統一鉱山労組のローカルに「東洋人、あるいは日本人部門」を設立するという提案は、委員長ジョン・ミッチェルによって明確に拒否されたということが、ユージ・イチオカの研究によって明らかにされているからである<sup>(15)</sup>。

おそらくこの第2項は21日の準備委員たちの会合の中ではじめて出てきたものではあるまい。メンバー数200人を越えるローカル81に加入すれば日本人は完全な少数派となる。その中でいかに日本人ブッチャーの独自の利害が

貫けるかという懸念が、交渉の当初から伊東等日本人側関係者の間にあって、彼らはローカル81に対してその懸念を表明していたのではないかと思われる。なぜなら、実のところホフマンはすでに先にあげた4月1日付けの『ユニオン・レコード』の記事の中で、もし必要ならば日本人ローカルを別個に組織する可能性もある、と語っているからである<sup>(16)</sup>。

ともあれホフマンは北米日本人会の、おそらく堀内理事による書簡の形で提出されたこの準備委員会の要求をただちに受け入れている<sup>(17)</sup>。この点でシアトルのケースはロックスプリングスのケースより一歩前進しているのである。けだしロックスプリングスにおけるジョン・ミッチェルのような本部の最高幹部がシアトルの場合介入しなかったことが幸いしたのであろう。

もっとも、この日本人だけの第2支部は実のところ1929年までには廃止されて、日本人組合員は結局ローカル81の本体に吸収されている。この廃止の理由、経過などについてまだ私は明らかにできていない。しかしながら諸般の事情に鑑みて、この廃止は日本人組合員の既得権の剥奪ということではなさそうである。むしろ時とともに1921年当時の懸念が薄れ、さらには信頼感が生まれ、双方ともにその必要性を感じなくなったことがこの第2支部の廃止をもたらした原因であろうと私は推測している<sup>(18)</sup>。

ともあれこうしてシアトル日本人肉店のローカル81への加入は決まり、4月27日には12名の日本人肉店経営者が、当時中央労働評議会をはじめとする多くのシアトルの労働団体がその本部を置いていた労働会館 Labor Temple における宣誓式に臨んだ。さらに29日、加盟肉店は第2支部の規約、役員選挙などについて協議するとともに中央労働評議会への日本人代表者として伊達昇を選んだ<sup>(19)</sup>。

私が別稿で明らかにしたように、この2年前の1919年のゼネラル・ストライキの際にも日本人代表が招請され、ストライキ委員会において白人代議員と同席することを認められた。しかしながらゼネラル・ストライキの興奮の渦中においてすら、彼らに認められたのは発言権はあるが投票権はないとい

う中途半端な資格であった。1921年の日本人は、ブッチャーズ・ユニオンに加入することによって正規の代議員として当時のシアトル労働運動の中心であった中央労働評議会に出席する権利を確保することができたのである。シアトルにおける労働団体と日本人社会との関係はこうしてまた一歩前進した<sup>(20)</sup>。『ユニオン・レコード』は以下のような記事で日本人ブッチャーのシアトル労働運動への参加を歓迎している

ブッチャーズユニオンはついにシアトルの日本人肉店の多くを組織することに成功した。将来少なくとも12, そしておそらくはもっと多くの日本人肉店が白人組合員が受け取っているのと同じ賃金をブッチャーたちに支払うことになるであろう。労働組合員たちは白人肉店が組織されていない地域では組織されている日本人の店と取り引きするべきである。食肉加工組合ローカル81のジョー・ホフマン書記長は土曜日にそのように勧告した。

新たに組合に加入した日本人はローカル81のプランチ2に組織された。そして将来自分たちで役員を選び組織を完成させるであろう。彼らは数年間に及ぶ、そして多大の努力が払われたこの数週間に頂点に達したところの、日本人と連帯するための運動の結果として組織された。

現在組合規定の賃金率を支払っている日本人食肉および魚店は以下のとおりである。

Rose grocery, 1000 Howell street; Denny Way Market, 115 First avenue North; Union Market, 2000 East Union; Harvard Market, 204 North Broadway, Rainier Market No. 1, 1123 Jackson Street; Rainier Market No. 2, 823 Yesler Way; Twenty-first Avenue Market, 525 Twenty-first Avenue; J. Inouye, 1119 Howell Street; East Pine Street Market, 1321 East Pike Street; Jackson Street Market, 677 Jackson Street; U. S. Market, 1207 Jackson Street; Madison Street Market, 710 Madison Street.

日本人ブッチャーは白人同志たちとの完全な連帯を約束しており、業界を100



パーセント組織しようと考えている。彼らはすでにバートン食肉その他の不公正な企業に反対の立場をとっている<sup>(21)</sup>。

他方で『大北日報』は、組合加盟に踏み切った日本人ブッチャーたちに次のような感謝の言葉を捧げている。

前期同胞ブッチャーが全米労働同盟の希望に従ひ各自の事情を捨てて一致団結して入會せしは何れも同胞の現状及び前途に鑑み個人の利益便宜を犠牲とし大局の上より考慮して決定せるものにして其の果斷の行動には在留同胞は大いに多とせざる可からざる所なり若し今日の場合ユニオン側の希望を無視し長時間の營業を繼續する場合ユニオンは自衛上之れに對して戦ひを宣せざる可からず而して來るべき影響は独り同胞ブッチャーの排斥のみに止らず延いては日本人全般に對するユニオン側態度の變化となり従來維持し來られたる親善關係は茲に傷つけらるるに至る可きは察するに難らざるなり従つて在留同胞も上記肉店に對しては出來得る限りの後援をなし其の營業の繁榮を計るに務む可きなり<sup>(22)</sup>

### III

しかしながら実はなお残された問題があった。3月15日の決議以来ローカル81が組織しようと努力してきたのは日本人肉店、および魚店であった。しかしながらこの段階で勧誘に応じたのは、『ユニオン・レコード』の記事はあたかも魚店も組織されたかのような表現をしているけれども、実は肉店のみであって、魚店の組織化は「同胞魚店については特種の事情あれば重ねて會合協議する」ということで見送られたのである。

この時に魚店が主張した肉店と異なる特殊な事情とは以下の2点であった。

- 一 日曜日と雖も魚類波止場に到着せる折は之れを処置する為めに日曜働きの除外例を求むる事
- 二 他地へ魚類送り出しに際しては必要に応じて時間外働きに異議なき事<sup>(23)</sup>

日本人ブッチャーによって結成されたばかりの第2ランチはこれをローカル81に取り次いぎ、魚店経営者にかわってこの問題の交渉にあたった。おそらくは肉に比較して腐敗しやすい魚の特質によると思われるこの要求には無理からぬものがあり、したがってローカル81は、この要求もまた承認したのである。

ところが魚店の多くはその後態度を変えて、第2ランチ関係者の書簡や個別訪問による説得にもかかわらず組合への加入を拒否し、さらには組合の規約に反する日曜営業、長時間営業を継続した。在シアトル日本人社会全体の利益のために犠牲を払ってローカル81の勧誘に応じた第2ランチ組合員は当然のことながらこれに怒った。そこで彼らは北米日本人会にたいして、もしも日本人魚店がこのまま態度を改めないならば仲介の努力を放棄し、シアトル中央労働評議会に事態を報告して善処を要請する、と通告したのである<sup>(24)</sup>。

かくして北米日本人会は、6月15日の役員会で再びこの件に介入することを決定した。そして6月20日、および23日に日本人魚店の代表者の会合を開いて午後6時閉店、日曜休業の励行を約束させた。加えて27日にも魚店の代表者の会合が開かれ、魚店組合を組織することが決定されて、3月15日のローカル81の決議にはじまった一連の騒動によりやく幕が下りたのである<sup>(25)</sup>。

#### IV

翌1922年3月22日のシアトル中央労働評議会においてローカル81は、「日

本人マーケットを一年前に組織し、それ以来後悔したことはない Organized the Japanese markets a year ago and have had no regrets since」と報告している。同評議会ではこれに加えて靴工組合 BOOT & SHOE WORKERS が日本人靴工を組合に加盟させようとしていることを、看板工組合 SIGN PAINTERS が日本人同業者との関係が良好なことを報告している<sup>(26)</sup>。

他方1923年の第10回太平洋沿岸日本人会協議会において、伊東忠三郎ら米国西北部連絡日本人会の代表たちは、協議会加盟の各日本人会は「其管内に於ける日本人各種組合に其の地方の米国人及加奈陀の各種組合に提携し利害を共にして親善を計るべく懇懇する」とともに、「之に関する成績は毎年協議会に於て報告する」という提案を行い、全会一致で可決させた。そしてその翌年の協議会でさっそく伊東忠三郎自ら、「昨年はグロサリー業者に米人の同種組合と提携するよう懇懇し目下同組合と協議中なり鉄道及製材所就働者に米国ユニオンに加入する様に勧誘する事となり居れり昨年報告せし如く既に連絡し居る組合は理髪業、洗濯業、加盟し居るはダイオーク、靴工業、ブッチャー合同創立せしもの野菜シッパー組合なり」という報告を行っている<sup>(27)</sup>。

それでは、シアトルにおける白人労働運動と日本人社会との関係はその後もこのように順調に進展したのであろうか。

たしかにかつてのように、あるいはカリフォルニアでは1920年代に入ってもそうであったように、労働運動が排日運動の震源であるような状況にシアトルが戻るということはなかった。しかしながら順調に進展したと言い切るのは実のところ私にはためらいがある。

結局のところ、ブッチャーズ・ユニオンは100に近いシアトル中央労働評議会加盟のローカルの中の例外にとどまり続けたように思われる。1929年発行の『米国西北部日本移民史』の中で竹内幸次郎はなおも、「日本人で沙港労働組合の正会員たるものはブッチャー組合に属する日本人丈である」と述べているのである<sup>(28)</sup>。

その理由の一つはおそらくこの間におけるシアトル労働運動の変化，すなわちダンカンを中心としたシアトル労働運動内部の革新派の衰退に求めることができよう。先の『大北日報』の記事も主張しているように，シアトル労働運動内部において日本人社会との協力を積極的であったのは主として革新派，あるいは急進派の活動家だったからである。しかしながらこの間の事情の究明は別稿に譲りたい<sup>(29)</sup>。

#### 註

- (1) さしあたり，拙稿「シアトル・ゼネラル・ストライキと日系人労働者（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）」（『岡山大学経済学会雑誌』第21巻第4号，1990年，22巻第1号，1990年，第22巻第2号，1990年）を参照。
- (2) かつて私は，「ブッチャーズ・ユニオンと北米日本人会の往復書簡」（『岡山大学経済学会雑誌』第25巻第1・2号，1993年）においてこの問題と関連する史料の一部を紹介したが，その当時はまだこの史料がどのような状況のもとに執筆されたものであるかについての理解が不十分であった。本稿はそれに新たな史料を補足して，ローカル81による日本人組織化の決定からその成功に至るまでの経過を明らかにする研究ノートとして整理したものである。
- (3) シアトル中央労働評議会の資料によれば，1920年1月現在のローカル81の組合員数は236人であり，その時点で評議会に加盟していた89組合（そのうち87組合が会費を納めており2組合は会費を免除されていた）のうちの中堅どころのローカルと考えると良いであろう。なお，同一職種の組合である butcher workmen 186が同じ時点で56人の組合員を擁しているが，この組合の勢力は先細りで1923年3月には10人となり，4月にローカル81と合併した。ローカル81は活動の歴史も古いようで，1903年の第1回ワシントン州労働総同盟の大会の記録にすでに Butchers No. 81の代表として2人の名前が記されている。なお，この大会に代表を派遣したシアトルの組合は33であった。以上，Central Labor Council, Seattle, *Membership and Per Capita Record, 1907-1925*, Central Labor Council, King County Records (Manuscript Collection of The University of Washington), Box 11, *Proceedings of the Central Labor Council of Seattle and Vicinity, June 1 1921 to Dec 28, 1927*, Central Labor Council, King County Records (Manuscript Collection of The University of Washington), Box 8, p. 451, *Proceedings of the Washington State Federation of Labor*, Seattle, Washington, January, 5, 6 and 7, 1903, p. 3.
- (4) Yuji Ichioka, *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*, The Free Press, 1988, pp. 113-119（富田虎男，桑井輝子，篠田左多江訳『一世——黎明期アメリカ移民の物語』刀水書房，1992年，126-133頁，参照。

- (5) *The Seattle Union Record*, May 26, 1920.
- (6) Letter from J. S. Hoffman to North American Japanese Association, April 15, 1921, Japanese Association of North America Papers (Manuscript Collection of The University of Washington), Box 1.
- (7) *The Seattle Union Record*, April 1, 1921.
- (8) 『大北日報』1921年4月18日。
- (9) 『大北日報』1921年4月18日。
- (10) 『大北日報』1921年4月16日。
- (11) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』(復刻版)雄松堂, 1994年(オリジナル版, 大北日報社, 1929年), 172, 148-180, 189-204頁。伊藤一男『北米百年桜』(復刻版)PMC出版, 1984年(オリジナル版, 北米百年桜実行委員会, 1969年), 192-194, 199-201, 203-206頁, 参照。
- (12) Letter from J. S. Hoffman to North American Japanese Association, April 15, 1921.
- (13) 以上, 『大北日報』1921年4月18日および4月20日。
- (14) Copy of the Letter from the Japanese Association of North America to J. S. Hoffman, April 25, 1921, Japanese Association of North America Papers (Manuscript Collection of The University of Washington), Box 1.
- (15) Yuji Ichioka, *op. cit.*, pp. 122-123 (邦訳, 136-137頁)。
- (16) *The Seattle Union Record*, April 1, 1921.
- (17) Letter from J. S. Hoffman to G. S. Horiuchi, April 26, 1921, Japanese Association of North America Papers (Manuscript Collection of The University of Washington), Box 1.
- (18) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』, 328頁を参照。
- (19) 『大北日報』1921年4月30日。
- (20) さしあたり, 前掲拙稿「シアトル・ゼネラル・ストライキと日系人労働者(Ⅱ)」, 79-80頁。ところで伊達昇は日本人で最初のシアトル中央労働評議会代議員なのであろうか。これについて実のところ私はまだ明確には断言することができない。なぜなら, この時すでにシアトルにおける白人, 日本人合同組合としてダイオーク組合があるからである。しかしながらいくつかの理由から, 今のところ私はダイオーク組合の日本人組合員は中央労働評議会の代議員にはなっていなかったのではないかと考えている。その理由のうち一つだけをここで記しておきたい。1921年4月27日の『大北日報』の記事の中に, 「白人ユニオンに加盟せる同胞は既にダイオーカーあり理髪業者あり今又茲にブッチャーの加盟許可せらるるに至りしは同胞発展史上特筆大書すべき出来事にして殊にブッチャー, ユニオンは加盟日本人に對して米国人同様の権利を承認する事となれるは米国に於ける最初の果断にして」という表現がある。この表現は, ブッチャー以外のケース, すなわちダイオーカー組合の場合は「米国人同様の権利」を日本人が得ていないことを示唆しているのではないだろうか。そしてもしそうだとすれば, 「米国に於ける最初の果断」であるかどうかは別にしても本稿で吟味しているブッチャーズ・

ユニオンの決断の意味はより重大なものとなってくる。なお、「理髪業者あり」とあるのは誤りである。日本人理髪業組合と白人理髪業組合は本文で述べたように友好関係にあるが合同組合ではない。

- (21) *The Seattle Union Record*, April 30, 1921.
- (22) 『大北日報』1921年4月29日
- (23) 『大北日報』1921年5月24日
- (24) ブッチャーズユニオン日本人支部から北米日本人会への書簡, 1921年5月30日, Japanese Association of North America Papers (Manuscript Collection of The University of Washington), Box 2
- (25) 『大北日報』1921年6月17日, 6月21日および6月28日。
- (26) *Proceedings of the Central Labor Council of Seattle and Vicinity, June 1 1921 to Dec 28, 1927*, p. 334 (March 22, 1922). 諸般の事情でこの靴工組合への日本人靴工加盟は実現しなかった。竹内幸次郎は「されど邦人組合は白人代表者との契約を重じ, 白人組合への加入金及び誓約書等は其俣組合に保留してある」と記している (『米国西北部日本移民史』, 326頁)。
- (27) 『太平洋沿岸日本人協議会議事録』(Japanese American Research Project Collection, University of California at Los Angeles), 第10回(大正12年)および第11回(大正13年)。
- (28) 竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』, 328頁。
- (29) さしあたり, 拙稿「ゼネラル・ストライキ後のシアトル労働運動」(『岡山大学経済学会雑誌』第24巻第4号, 1993年), 479-481頁。

## The Butchers Union and Japanese Butchers of Seattle in 1921

Katsutoshi Kurokawa

The relationship between the labor unions and Japanese Americans in Seattle improved much after the Seattle General Strike of 1919. Few unions, however, admitted Japanese workers as the regular members even in Seattle. One of the notable exception is the Local No.81 of the Butchers Union. It decided to organize the meat and fish shops managed by Japanese at the meeting of March 15, 1921 and asked the cooperation of Japanese Association of North America.

The year 1921 is the critical year for the Japanese in Seattle. Anti-Japanese organizations were very active and many bills which would regulate economic activities of Japanese were introduced to the State legislature and the city council. Japanese Association, therefore, feared to lose the friendship of labor unions and persuaded the Japanese meat and fish shops to accept the proposal of th Local No.81.

Soon Japanese shops were organized. Japanese butchers organized the Branch No.2 of the Local No81 and even began to send a delegate to the Central Labor Council of Seattle which was the center of the labor movement in Seattle in those days.